
藍川高校恋譚。

香道悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藍川高校恋譚。

【Nコード】

N3795F

【作者名】

香道悠

【あらすじ】

私立藍川高等学校。正門から昇降口までの距離が果てしないくらい長いことを除けば、これといった特徴もない、平凡な高校。そこに通う、これまた平凡な高校生たちの。ちょっとした恋のお話を、綴ってみました。

1（前書き）

このお話はB L要素を含んでいます。

B Lの意味が分からない方、苦手だという方は、
他のお話に飛んだほうが良いと思います。

大丈夫だという方は、どうぞ。

「それじゃ、涼しやうっ！また明日なーっ！」

「え、いや、雀人すずめひとっ、ちょっと待っ・・・」

教室のドアを開け放ち、雀人はそのまま飛び出していく。

残された涼の背中に、現代文担当の上条かみじょうが近づいた。

「・・・さてと。今度はどんな罰則にしようかな？」

大学を出て2年目だという上条は、寒気がするほどの笑顔で涼を見下ろしてきた。

涼はそちらを向かず、開いたままのドアを見つめて答える。

「いや、先生。もう無駄だと思います、彼には。」

「それもそうだね！。及川君、君がかわりになってくれる？」
おいかわ

「え、な、なんで俺が・・・っ」

抗議しようと振り向くも、上条のその誰をも仕留めんとするような笑顔に圧倒され、言葉につまる。

そのまま、上条に教科書の類をドサツと両腕に寄せられた。

「ま、責任持つて運んでね。そだ、みなさん。今度小テストするからねー。」

「はあ！？」 だの「うそだろーっ」とかいう声を背に受けつつ、上条は悠々と教室を出て行った。

そして、教室中の視線が、及川 涼へと向く。

そして一言。

「及川っ！ お前のせいだからなっ！」

「だからなんで俺なの・・・」

階段を上って、渡り廊下を越え、左に曲がった先の5番目のドア。

通い慣れた道を、雀人は全力で駆けていく。

目標は、一年先輩の春原すのはら 裕紀ゆつき。

最後の授業が終わったなら、春原を迎えに行くのが日課になっている。

教室の前でいったんストップし、大きく息を吸い込んで、ドアを開けて。

「せんぱーいっ！ お迎えに——」

初めて春原先輩に会ったのは、俺が中学3年生の時。

ここ、藍川高校の秋期オープンスクールに来た時だった。

当時の学力じゃ正直厳しい学校だったから、まったく興味が無かったけれど、

小学生の時からいっしょの涼に誘われたこともあって、とりあえず行ってみた。

全体説明会が終わり、涼と一緒に部活動見学をしていた時だった。

唯一興味があつた合唱部を見学し終えていた俺は、相当とぼけた顔をしていたのか、

当時2年生、現在3年の部長兼主将の進藤先輩しんどうに声をかけられた。

「弓道部が今練習してるんだけど、見ていかない？」

だるさが最高潮に達していたけれど、涼に「行ってみようよ」と言われたので、

とりあえず見に行くことにした。

結果、これが最高にいい判断だった。

道場の中には、当時1年生、現在2年生の方々が・・・何人いたっけ・・・。

とりあえず練習していた。

その中で、一番後ろで弓を引いていた人。

背は高くないけれど、なんかよくわからない不思議な感じがする人。

他に何人も人がいるのに、なぜかその人だけに目が行った。

最初はたぶん、好奇心から。

その人が弓を引分け、会に入っていくうちに、だんだん体が熱くなつて。

矢を放つて、ピシッと決めたあの姿勢を見た瞬間に、心臓がばくばく言い出した。

冷静になつてゐる今じゃ、その気持ちなんていつのかわかるけれど、なにがなんだかわけがわからない状態だったその時の俺は、何も考えることなく、

引き終わったその人に向かって走って行き、先輩の右手をゆがけの上から握り締めて言った。

それも大声で。

「めっちゃ・・・カッコよかったですっ!!」

ちょっと間が開いたのは言葉選びのため。

「カッコよかった」と言っつもりではあったけれど、その人の顔を正面から見た瞬間に、

「あ、やっべ、めっちゃかわいいっ!」と想ってしまったから、できた間。

さすがに「かわいかったですっ!!」とは言えない。

なにせその人は、男の子だから。

その人はきよとした様子で俺を見上げ、そして言った。

「・・・そつか。」

「あ、お、俺、とうでう藤堂 雀人うずって言います！ 先輩は！？」

「・・・春原。」

「下は？？」

「・・・裕紀。 春原 裕紀。」

「春原 裕紀先輩ですね！ お、俺、今の学力じゃちょっと厳しいかもしれないけど、

カラオケとか、ボウリングとか、女の子とか、全部我慢して勉強して、

それで、絶対この学校に入って、

弓道部に入りますからっ！ 後半年待っててくださいね！」

「・・・ああ。」

「絶対来ますからっ！ 忘れな・・・ちよっ、涼、引っ張るなっ
っ」

「はいはいうるさーいかえるよーおさがせしましたーさよーな
らー。」

劇的な出会いだった。

何人が付き合いを持ったことはあったけれど、春原先輩ほどに焦がれたことはなかった。

当時、春原先輩に彼女がいたのか、狙ってる人がいるのか、

そこまで考えることができなかった俺は、

入学までの後半年に、ずっと焦りを感じていた。

あの宣言通り、俺は本当に遊ぶことをやめ、一心不乱、無我夢中で勉強した。

「・・・258・・・261・・・262・・・264・・・26
8っ！ よしっ！」

受験番号は268番。人間やればできるんだなって真剣に思った。

受かったとわかったら、次にやること。

「おい、雀人！。番号あつたー？・・・ん？」

笑顔で左手を振りながら近寄ってきた涼の右手をつかんだ。

この様子なら間違いなく受かってるんだろう。

俺は涼を引っ張って走り出した。

「うえええっ！　ちょ、雀人っ！　なにーっ！？」

「ちょっと付き合えっ！」

「はぁ！？　ちょ、どこに！？」

「弓道場っー！」

「あ、なるほど。」　と、涼が理解したところでスピードを上げる。

合格掲示板のあった昇降口からグラウンドの前を駆けていき、そして弓道場へ。

左手に受験票を握り締めて。

道場の玄関に、道着姿でもたれかかっている人が目に入った。

腕を組んでいたのを解いて、こっちに手を振ってくる。

誰だっ たっ けか。

「よお、藤堂だっ けか。 受かっ た？」

「はいっ！ えっ と・・・」

「お前が入る頃には3年生になる進藤だ。 よろしくな。」

後、俺のことを進藤先輩とは呼ぶな。 進藤さんって呼んでくれ。
なんなら呼び捨てでも構わない。」

「え、あ、はい。 進藤さん。」

そうだ。 あの時声を掛けてくれた人だ。

あれからは春原先輩のことしか頭に無かったから、すっかり忘れていた。

「あのっ・・・ 春原先輩は？」

中にいるよと、進藤さんが小さく笑いながら玄関を指差した。

それを合図に、俺は格子戸に飛びついた。

だが格子戸は、いくら押しても開かない。

「え・・・ あれ？」

「・・・雀人。 こういうのは普通引き戸だって・・・」

「・・・あ！」

「サンキューっ」 と一声残して、格子戸を勢い良く開けた雀人は
道場の中へ駆け込んだ。

後ろで二人の笑い声がしたような気がする。

道場内にいたのは、行射中の春原先輩だけだった。

なぜか少し背が低くなったような気がしたけど、それ以外は半年前とまったく同じだった。

行射が終わって、弓倒しをした先輩が俺に気付いて、こっちを向く。

俺は心臓がだんだんと脈打つを感じながら、ゆっくりと春原先輩に近づいた。

「お、お久しぶりです！ 藤堂ですっ！」

「・・・え、ああ、うん。」

「先輩っ！」

左手に握っていた受験票をずいっと突き出す。

「俺！　ちゃんと合格しましたっ！」

「・・・いや、数字だけじゃわからな・・・」

「入学したらずぐに入部しますからっ！」

そして春原先輩の右手を引っつかんで。

「ちゃんと待っててくださいねっ！」

「・・・」

先輩が少し驚いた様子で、こっちを見てきた。

俺は心臓の高鳴りを抑えることが出来ず、思わず質問した。

「せ、先輩っ！ お、俺のこと、覚えてましたか！？」

「・・・え、あー、うん。」

・・・先輩が驚いて黙ってしまった理由が、わかった気がする。

でも、この会話ができたことで、今までがんばってよかったと思った。

入学式後、涼はサッカー部へ、俺はもちろん弓道部に入部した。

そして俺は、最後の授業が終わるたびに先輩を迎えに行く。

最初は「名前を覚えてもらいたいのぞ。」 という理由で。

「もう覚えた。」 と言われてからは「これが後輩の務めつてもんです！」 と無理やり。

「無理するな。」 と言われてからは「もう体が慣れちゃいましたからー。」 という具合で。

「来るな」 と言われてからは「善処しまーす。」 と流して。

先輩はなんとも想つてないみたいだけど。

半年も会えなかった俺の焦りようは半端無くて。

半年間会えなかった分、1秒でも長く、先輩の側にいたいがために・

「——ありがとうございましたっ!!」

吸い込んだ息を一気に吐き出しながらそう叫ぶと、先輩は廊下とは反対側の窓際の席に座っていた。

声に反応した先輩は、肩口まで流した黒に近い茶色の髪を左手でいじりながら、こっちに目を向けた。

いつもなら先輩は右手を挙げて返してくれるけど、今日はなかった。

かわりに髪をいじっていた左手を、小さく溜め息をつきながら顎に当てた。

ジトーツとした目でこちらを睨んでくる。

と思っていると、ふいっと窓の外に目をやって。

実はこちらに向けられた視線は、先輩のものだけじゃなくて。

先輩の前の席の人、後ろの席の人、隣の席の人、その隣の席の人。

人の輪はどんどん大きくなって。

教室内にいらっしやるすべての方々が、俺を見ておられました。

2、3秒の沈黙の後、教壇にいた先生からお言葉。

「え、えっと、藤堂君？　まだチャイム鳴ってない・・・よ？」

「・・・で、すよねーっ・・・は、は・・・」

その直後に鳴るチャイム。

途端に教室中に笑いの渦が起こった。

窓の外を向いていた先輩は、さっきよりも大きな溜め息をつきながらこつちを向いて。

俺と目が合った途端、ふつと笑った。

その顔に、思わずどきつとする。

（2ヶ月しか経ってないのに、俺、早くも限界かもしれないですよ先輩・・・）

教科書類を腕に抱えて、ゆっくりと近づいてくる先輩を見ながらそんなことを考えていると、

「
ばか。」

先輩の手から地学の教科書が放たれ、俺の顔に何の迷いもなく命中する。

「痛っ！ 何すんですかーっ」

「お前が悪いんだろ。これ全部持て。」

と言って、教科書の類を俺の腕に乗っける。結構な重さ・・・

「ええー、ちょーせんぱーい。許してくださいってー」

「うるさい。早く歩け。」

そう言って鞆を肩にかけ、先に行く先輩。

俺は先輩の教科書類が腕に乗った反動で肩から落ちそうになっていた鞆を担ぎなおし、

先輩の後を追いかける。

そしたら先輩が顔だけちょっとこっちに向けて立ち止まって。

「そうだ。」

「はい？」

「出迎え、ご苦労。」

と言ってまた前を向いて歩き出す。

その言葉に、笑みを我慢することができなくて、ぷつと吹いてから。

「いえいえー」

俺は先輩の後ろにしっかりと付いていく。

「いつかやるんじゃないかとは思ってたけど。」

「・・・まさか本当にやるほどばかだとは思ってなかった。」

「だから謝ってるじゃないですかー。ごめんなさいってー。」

「しかもなんでチャイムが鳴る前に来れるんだよ？」

「授業がまだ終わってないってことだろ？」

「俺授業現代文だったんで、目が覚めたらお迎えにっと思ってたら・・・って感じです。」

さっきの教室突入についてくどくどと言われながら、俺は先輩の後ろを付いていく。

「・・・現代文もちゃんと受けろというか授業中に寝るなってゆーか迎えに来なくていいから。」

「すいませーん、一個一個言ってくださいー。」

「現代文もちゃんと受けろ。」

「えー、だって現代文とかだるくないですか?」

「上条先生のだろ? うちの顧問なんだからしっかりやれよ。」

「先輩以外の人に興味無いですー。」

と言った途端、先輩の弦巻が飛んできた。

またなんの迷いもなく、俺の顔に命中する。

「痛っ! ・・・先輩よく物投げますねー。」

「お前のその言葉は聞き飽きた。」

「弓具投げちゃダメですよー。」

「授業中に寝るな。」

器用に教科書類を支えながら弦巻を返すと、次のお言葉が降ってきた。

自分に都合の悪いことはサラッと流す先輩。もう慣れたけど。

「無理ですー。　　というか寝てるほうがいろいろいいと思いますよ。」

「なんで?。」

「だって夢の中は自分だけの世界なんですよ?」

俺たぶん夢の中のほうが先輩とよく会ってる気がしますよ。」

また弦巻が飛んできた。

そしてまたなんの迷いもなく、俺の顔に命中する。

「痛っ！ あの、先輩、俺一応両手塞がってるんですけど・・・」

「人を勝手に夢の中に出すな。」

「先輩が勝手に出てくるんですよー。」

「そして前にも言ったがいちいち迎えに来なくていい。」

また器用に教科書類を支えながら弦巻を返すと、次のお言葉が降ってきた。

それこそ何回も言われて聞き飽きた言葉。

「前にも言ったように、善処しまーす。」

「・・・お前、善処の意味知らないだろ。」

「え？もつといいことするんですよ？」

「・・・訊いた俺がばかだったよ。」

先輩が前を向いたまま、大きく溜め息をついた。

今気が付いたけど、合格発表の日に会ったときより先輩が小さく見える。

「春原先輩？」

「ん？なに？」

こつちを振り返って足を止めた先輩に一言。

「先輩、背、縮みました？」

2、3秒、静かな風が流れる。

先に動いたのは先輩だった。

さっきよりも大きな溜め息をついて。

肩にかけていた鞆を右手に提げて。

そして2、3回ぐるぐるつとまわして。

そして俺をキッと睨む。

状況的に「やべっ、地雷踏んだっ！」
と思ったけど、遅かった。

「んなわけないだろっ、ばかーっ!!」

なにやらごちゃごちゃ入っているであろう先輩の鞆が。

これまたなんも迷いもなく、俺の顔に命中した。

5（後書き）

藍川高校恋譚。 はホームページに適度にまとめてあります。

「Indigo River」↓「http://indigo
river.yu-nagi.com/」

よろしければ遊びにいらしてください。

「ちょっと寄るところあるから先に行つてろ、ばか。」と言われ、

弓道着に着替えた俺は、道場の中央に正坐させられている。

目の前には腕組みをし、同じく正坐をした進藤さん。

放課後になってからまだ早く、道場内には2人しかいない。

(・・・なんだろう、この空気・・・)

サッカー部がグラウンドで練習している声が聴こえるほど静かな弓道場。

それもこれだけ人がいないと気が変になりそうな雰囲気。

（・・・春原先輩、助けて・・・）

「藤堂。」

「はいっ!？」

突然声をかけられて、思わず叫んでしまった。

だが進藤さんは顔を崩さずに、そのまま続ける。

「俺は遠まわしに物事を訊くのが苦手だ。」

だらだらと質問を繰り返すうちに、本来訊きたいことを見失う。」

「は、はぁ・・・」

「だから単刀直入に訊こう。構わないか？」

「ど、どうぞ。」

もつしどろもどろだ。

先輩は一体何をしているんだろう。

「では尋ねる。」

「は、はい。」

「春原とケンカでもしたのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

5秒は間があっただろうか。

「な、なんですか？」

「いや、いつも2人揃って道場に入ってくるのに、今日はお前1人だからな。」

ケンカでもしたのかと。」

「あ、あー、いや、ちょっと寄るところがあったらしいです。」

弦巻なり鞆なりが飛んできた場面を思い出す。

「ケンカじゃないんだな？」

「違う・・・と思います。」

「ならいいんだ。俺はあいつが他の誰かと話す光景を見たことがないからな。」

ケンカ別れでもしてたら二度と活動に来ないんじゃないかと思った。
「

「ケンカって言葉好きなんですネ・・・ってか。」

立ち上がって矢筒から矢を出そうとした進藤さんに、それ本当ですかと尋ねると、

俺が見ている限りだが、と返ってきた。

「人付き合いが苦手とは思えないんですけど・・・」

「・・・んー、まあそこは本人に訊け。」

「それって訊くもんですっけ・・・」

「お前なら教えてくれるかもしれないな。」

四六時中一緒にいるんだろ？」

「いや、それは無理です。」

まあそうだろうなと進藤さんが笑う。

そろそろ足もしびれてきた。

「いっそのこと、結婚でもしたらどうだ？」

「なっ！・・・痛っ！」

震える足を支えながら慎重に立ちつつあったのに、進藤さんの一言で全部無駄になった。

正面から勢い良く倒れる。でも顔は守った。

「な、な、何言ってるんですかつ」

「・・・冗談で振ったつもりだったんだが・・・」

進藤さんが恐ろしいぐらい笑顔で言う。

「まんざらでもないみたいだねー、藤堂君。」

「な、いや、だって先輩は、お・・・っ」

はっとして、言葉につまった。

そう、先輩は、男だ。

そして、自分も同じように。

「何？ お？ なんだった？」

「・・・いえ、なんでもないです。」

「んーまあ、だいたいわかるけどな、言おうとしたこと。」

進藤さんが弓に弦を張り始める。

俺は突っ立ったまま何をするともなく、進藤さんの方を向いていた。

「まあ、がんばることだな。人の好き嫌いに弊害なんてよくあることだ。」

「・・・」

「お前にはまだ時間があるからな。俺なんか受験のせいであまり残ってないし。」

もう少し勉強しといたらよかったなー。」

「・・・え？先輩も・・・？」

その時、玄関の方から声が聴こえてきた。

他の弓道部員が入ってくる。

でもその中に先輩の姿は無い。

「ま、適当にな。」

進藤さんが俺の頭をポンツと叩いた。

その顔はさっきの恐ろしい笑みとは違う、何か暖かいものが感じられた。

「もうすぐ春原も来るだろ。いつもみたいに迎えに行ってやれば？」

「え・・・あ、はい、そうします！。」

なんか気恥ずかしく感じて、逃げるように玄関を出る。

今の俺の顔、たぶん緩みまくってる・・・

しっかりしろつと両頬を一回叩いて、校舎の方へと歩き出す。

結論から言つと、先輩を見つけるのはそう苦労しなかった。

先輩はグラウンドへの石段の頂上に座っていた。

それも、今まで見たこともない、俺にとっては最高の笑顔で座っている。

先輩の目の前には、背の高い誰か。 2年生か、3年生だろうか。

その男が何かを言つたびに、先輩は笑っているみたい。

あまりに突然すぎて、どういう状況なのかまったく理解できなかったけれど。

その笑顔が、俺に向けられたものじゃないと分かると、

胸の中に嫌な違和感を感じた。

普通に見れば、単に先輩がお友達と楽しくおしゃべりをしているだけなんだけど。

俺と話すときには絶対見せないような笑顔を、目の前の男に見せているということは、

なんか悔しいような、腹立たしいような・・・

「とーうどーうくーん。」

「うわっ、ちょ、進藤さんっ」

進藤さんが俺の頭に顎を乗せ、勢いよくもたれかかってきた。

進藤さんもこんなことするんだなと、どうでもいいことが頭に浮かぶ。

「堂々と垣間見るのは垣間見とは言わないのだが。」

「何わけわかんないこと言ってるんですかつ、って離してください、重いですって・・・」

「あの人。」

「え・・・」

「気になるんじゃないの？」

進藤さんが首に腕を回してきた。

いつの間にか、後ろから抱きつかれた形になっている。

「べ、別に・・・気になったりなんか・・・」

「ホントにいい？」

「・・・」

「顔赤いよ。」

「う・・・」

「一途だねえ、ホント。」

進藤さんが頭上で吹き出す。

顔は見えないけれど、たぶんどこまでも嬉しそうな顔をしてるんだろっな。

「・・・誰なんですか？」

「んー、誰だと思う？ 予想は？」

「・・・いや、わかりません。」

「まあ、あれだけ身長があつたら普通わからないわな。」

たぶん30は差があるだろうし。」

進藤さんが回していた右腕の肘を俺の肩に乗せた。

そして顎を右の手のひらに移す。

「・・・で、誰なんですか？」

「俺の同級生かつお友達。 矢内 浩行って言ってサッカー部のキヤプテン、だったはず。」

大学もサッカーでどうのこうの言ってたっけな。」

「サッカー部・・・？」

「俺も元々サッカー派だったんだけどな。」

ちょっとした理由で弓道部に入った。」

「・・・どうしてサッカー部のキャプテンと春原先輩が・・・？」

訊くと、進藤さんは少し考えるようにうーんと唸ってから。

「内緒。」

「・・・内緒なんですか。」

はあ、と溜め息をつく、進藤さんの言葉が降ってきた。

「俺が勝手にそのことについて話すわけにはいかない。すまん。」

「え・・・な、なんでですか？」

「そのへんは本人に訊けって言わなかったっけか。」

「そ、そんなに深い意味だったんですか、あれ。」

「あ、なんだそれ。　ちょっと傷ついたぞコノヤロー。」

進藤さんが右腕に力をこめて圧してきた。

「ちよっ！　進藤さん痛いっ！」

「ま、今のところ矢内はお前が心配してるような感情は持ってないと思うぞ。」

「いつもあんな風にしゃべってるしな。」

「でも・・・」

「ん？」

「あんな風に笑う先輩・・・見たことないです・・・」

素直に思ったことを言っただけだったのに、予想以上に響いたのか

進藤さんは少し黙ってしまった。

「まあ・・・俺はお前のほうが春原に近い存在であるような気はするけどなあ。」

そんなに焦る必要も無いと思うけどな、藤堂。」

「・・・」

でもまあ、と言いながら、進藤先輩は回していた腕を解いた。

そして道場の方へ歩きながら言った。

「ボーツとしてると、とられるかもな。」

そのまま道場の中へと入っていった。

「応援してんですか、それとも脅してんですか・・・」

「何ぶつぶつ言ってるんだ？　こんなところで。」

ハッとなって振り返ると、目の前に春原先輩がいた。

いつもの顔で俺を見ている。

「・・・？　なんだよ人の顔じつと見て。」

「あ、いえ、なんでもないです。」

「練習しないと時間がもつたないだろ。」

そう言って、道場の方へと歩き出す。

俺は我慢できずに、先輩を呼び止めた。

「先輩っ！ あの・・・」

「ん？ 何？」

「・・・いえ、やっぱりなんでもないです。」

訊きたいのは山々なんだけれども、いつもと変わらない先輩の顔を見ると、

やっぱり切り出せなかった。

先輩が俺の顔を覗き込んでくる。

「・・・お前なんか今日変だぞ？ 鞆投げたのが効いたか？」

「あ、いえ、あれは大丈夫です。 ホントなんでもないのでから。」

「・・・そっか。 ならいいけどな。」

そう言つて先輩はまた歩き出す。

それに遅れないようにちゃんと後ろを付いていく。

「あ、そつだ藤堂。 今思い出した。」

「なんですかー？」

「明日時間割変更入ったから。 最後音楽室な。」

「・・・え？」

だから、と言いながら先輩が振り返る。

「迎えに来るんなら間違えるなよって言ってるの。」

それとその顔で来るな。それなら授業中に突っ込んでくる方がよほどいい。」

「・・・先輩、それって・・・迎えに来てほしいってことですか？」

「なっ、おいちょっと待て！誰もそんなこと言ってないだろうっ

い、嫌なら別に来なくていいからっ」

そう言っただけで慌てて道場へと歩き出す先輩。

俺はその姿にぶつと吹き出してから。

「了解ですっ！」

俺はそう叫び、走り出した。

いきなりの大声に驚いて振り返った先輩の左手を握り、また叫ぶ。

「練習時間が無くなりますよ！ 速く！」

「ちょ、わかったからっ！ 手はなせっ！ ……おいっ！」

そのまま俺は道場の中へと入っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3795f/>

藍川高校恋譚。

2010年10月12日13時47分発行